

事実に基づいて考え、表現する力を育てましょう

社会科は、社会における人間相互の関わりを学ぶ教科です。自分が社会とどのように関わっているのかを理解し、自分もその一員である社会の維持・向上のために何ができるのか、何をすればよいのかを自分自身に問い、自分の生き方を考えることが大切です。

事実を知ることによって学習を終わらせるのではなく、知ったことについて、「自分はどうか考えるのか」「だから、どうするのか」と事実を自分に引き寄せ、現在あるいは将来について考えさせたいものです。そうすることで、社会生活についての理解が深まり、生活に役立つ知識として獲得することができます。学んだことを生活に生かしてこそ社会科を学習する意味があるのではないのでしょうか。

例えば、「人々の安全を守る工夫」では、消防署や警察署などを取り上げて学習します。この単元で理解させたいのは、消防署や警察などが中心になって関係諸機関が相互に連絡を取り合いながら緊急に対処する体制をとっていること、そうした関係諸機関の働きと人々の努力によって地域の安全が守られているということです。その理解に立って、地域住民がどのように協力しているのかを学習し、自分とのつながりや地域の一員としての自分の役割などを考えさせることが大切です。



1 根拠を示しながら自分の考えを表現する活動を充実させましょう

これまでに実施した調査結果をみると、自分の考えを記述する問題での無解答の割合が高くなっています。また、考えを述べていても、理由が書かれていないものや示された資料に基づかない解答が少なくありませんでした。社会的事象について自分なりの考えを述べ、根拠を示しながら説明できるよう、指導の充実が望まれます。「書くこと」や「話し合う」活動を学習過程に効果的に取り入れ、児童の思考を促すとともに、学習したことや考えたことを表現させる指導を大切にしましょう。

「書くこと」や「話し合う」活動を授業に位置付けましょう

- 1 毎時間ノートに自分の考えを簡潔に書かせるなど日常的な指導を積み重ねていく。
- 2 追究やまとめの段階で、話し合う場面を設け、獲得した知識や技能を使って調べたり表現したりする活動を充実させる。



(1) 考えをまとめたり深めたりするためにノートを活用させる

指導のポイント

ノートに自分の考えを書くことを習慣にさせる。

「自分の考えの足跡」が分かるように書かせる。

- ・ 学習中にどのようなことを考えたか
- ・ なぜそう考えたのか（理由や根拠となる事実）

「自分の考えを書くこと」、「自分らしいノートづくり」を意識させる。

書くことは、理解をより確かなものにしたり考えを深めたりするのに有効です。また、自分のノートやワークシートを読み直して学習の過程を振り返ったり、理解の状況を教師が把握したりすることに役立てることもできるので、教師の説明を聞き友達の考えにも触れながら自分の考えを深めていくために活用できるよう、ノートの使い方を指導しましょう。

授業では、板書事項を書き写したり教師が指示したことをメモしたりするだけでなく、自分の考えを書くことや自分らしいノートになるよう工夫させましょう。参考になる書き方をしているノートを紹介したり、よい点を指摘したりするなど、具体的に指導します。

資料や友達から何を学んだか、そのことによってどのように考えが深まっていったか、学習の跡が見えるノートにしていきましょう。



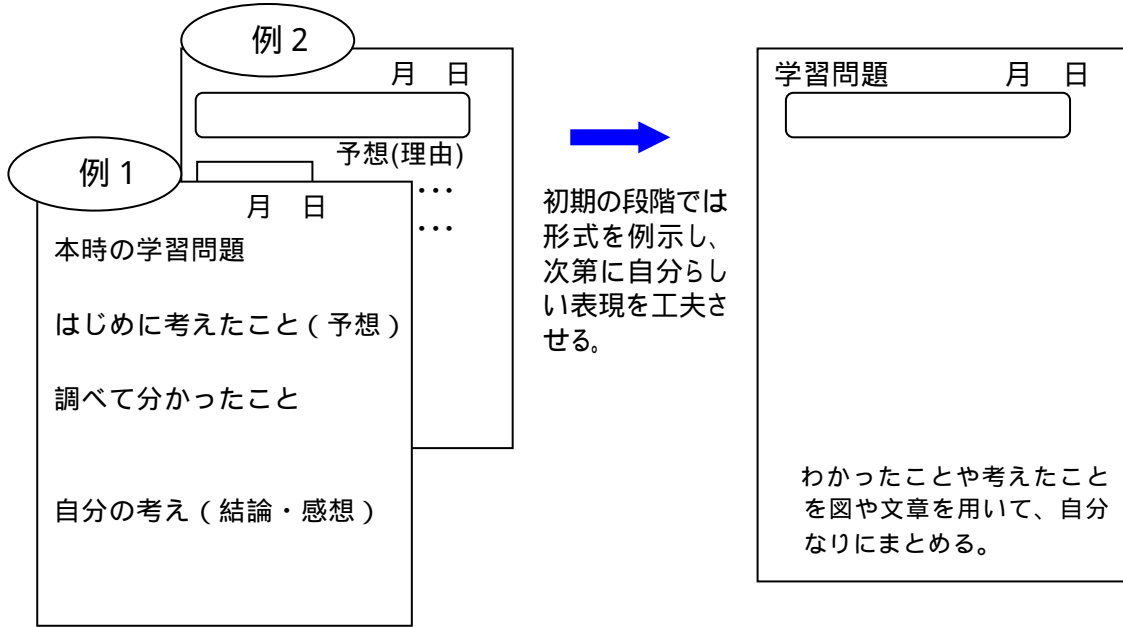
ただし、ノートの使い方にこうしなければならないという決まりがあるわけではありません。自分の考えをまとめたり新しい考えを引き出したりするなど、学習を進めていくためにノートを活用し、児童自身が使い方を工夫していくことが望ましいと考えます。ここでは、「ノートに自分の考えを書くこと」を意識させ、自分の考えをまとめたり深めたりするための活用例を示しますので、参考にしてください。

例えば、右のように、ノートを見開きで使用し、左側には板書や教科書等の要点を、右側にはそれらと関連して自分で調べたことや考えなどをまとめさせていくという使い方できます。

学習内容の 要点 ・板書 ・重要な言葉	自分の考え ・疑問 ・予想 ・感想 ・結論 考え など
------------------------------	---

ノートの使い方について段階的に指導する

また、ノート指導の初期には、例1、例2のような形式を示し、児童の実態に応じて段階的に指導することも大切です。いつ、どのようなことをノートに書かせるのかをあらかじめ整理しておくことは、授業のどの場面で、何について考えさせるのか、話し合いや意見交換の場をどこに組み込むかなど、授業の展開を構想する際にも役に立ちます。



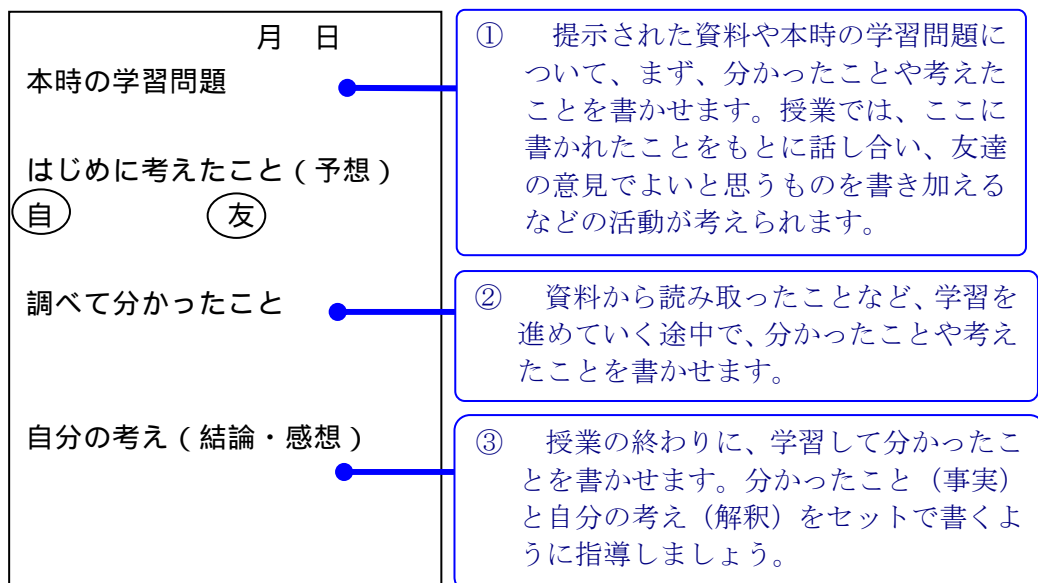
ノート指導では、板書の工夫も重要です。児童の発言や学習内容の要点を分かりやすく示し、「これだけは必ず全員がノートに書くこと」について、きちんと指示しましょう。



【ノートに書かせること】

- ・学習内容の要点
- ・重要な言葉
(キーワード)
- ・新しい問題

(例1) 資料の読み取りや1時間の授業におけるノート



学習過程を意識させてノートをとらせる

学習問題をどのように追究していくのか、必要な資料は何か、どのように考えたのかなど、学習の過程が分かるようにノートを書かせることは、追究の手順を身に付けることにつながります。「問題の把握－予想－追究－まとめ」という学習過程を意識してノートを書くよう繰り返し指導しましょう。



(例2) 数時間にわたる授業におけるノート

① 単元名だけでなく学習問題を書くことによって、これからどんなことについて学習するのか、学習のめあてがはっきりします。

③ 学習問題に対する自分の予想を書くことで、調べたいことが焦点化します。なぜそう考えたのか予想の根拠となる理由も書かせておくと、いつでも自分の問題意識を確認することができます。

単元名	月	日
学習問題		
資料	予想(理由)	
調べること・方法		

調べて分かったこと		
資料ア	アについて	
資料イ	イについて	
(比べたり、関連付けたりして分かったこと)		

学習のまとめ (結論・感想)		

② その時間あるいは単元で使用する中心資料を貼らせておくと、その資料を意識させながら学習を進めることができます。

④ 予想を確かめ、学習問題の答えを出すためには、何を、どのように調べればよいか、学習の見通しをもたせます。これまでの学習経験を想起させたり教科書を参考にさせたりするとよいでしょう。

⑤ 資料を貼る、題名やページをメモするなど、学習問題について考えるための手がかりになったものが分かるようにしておくよう指導します。

⑥ できるだけ複数の資料や方法を用いて調べさせ、それぞれについて分かったこと、さらに比較・関連付けて分かったことを書かせるようにします。文章だけでなく、関連などを図で表現させてもよいでしょう。
児童の発達段階やこれまでの学習経験に配慮し、比べる観点を助言したり、共通点や因果関係に着目させたりするなど、児童の実態に応じた指導を行います。

⑦ その時間や単元の学習を通して分かったことや、学習して考えたことを、自分なりの結論としてまとめさせます。
次のような例を示し、根拠とあわせて自分の考えを述べる際の参考にさせるとよいでしょう。

(学習問題) _____ について、

- ・私の考えは、.....です。(意見)
- (私は、.....と思います。)
- ・なぜなら.....(理由・根拠)
- ・たとえば.....(例)
- ・だから.....(結論)

(2) ペアによる対話を位置付け、「書く」「話す」機会を増やす

指導のポイント

自分の考えを書かせてから、意見交換をさせる。

書いたものを見せながら説明させる。

質問したりよさを指摘し合ったりさせる。



その単元で用いた資料やノートの記述などを活用しながら友達と対話し、学習問題について考えさせる場面を設けましょう。ペアによる対話の場면을授業に組み込むことで、一人一人の児童が自分の考えを書いたり述べたりする時間を確保し、自分の考えを言葉や文で表現する経験を積ませることができます。

ペアによる対話の場面を組み込んだ学習の進め方の例

「飲料水の確保」(第4学年)

第1次

飲料水が家庭に届くまでの経路や施設の働きなどを調べて経路図にまとめる。

第2次

経路図を活用し、「学習問題：生活に必要な水をいつでも使えるのはなぜか」を考える。

【学習の進め方】

学習問題について、自分の予想をノートに書く。

友達とペアを組み、互いの予想と理由を説明する。

一緒に経路図を見ながら、次の内容について確認する。

ア ダムや浄水場の働き

イ 人々の協力関係

学習問題に対する自分なりの結論を図や文章などで表現する。

「水道の蛇口を開くと、いつでも水が出てくるのは、……………」

「毎日、私たちが安心して水道の水を飲めるのは、……………」

再度、ペアを組み、互いに表現したものを発表し合い、感想や意見を述べ合う。

第3次

- これまでに使った資料やノートの記述などを参考にしながら、水道水を詰めたペットボトルを紹介するキャッチコピーを考え、説明を添えて表現する。
- 各自が考えたキャッチコピーを理由とともに発表し、意見交換を行う。

(3) 学習問題について、分かったことや考えたことを書かせる

指導のポイント

本時のねらい(学習問題)を確認させ、「学習問題について考えたこと(結論、疑問、仮説など)」や、「特に大事だと思うこと」を書かせる。

事実と意見を関連させて書くことができるよう、板書などで学習内容を整理したり、例を示したりする。

(例)・・・という事実について、私は・・・と考える。

学習問題「……」について、自分の考えをまとめて書きましょう。特に大事だと思うことや伝えたいことを書くようにしましょう。



授業の終わりには、分かったことや考えたことを自分の言葉でまとめさせましょう。ここでのポイントは、「学習問題について」書かせることです。学習問題に照らしながら、その授業あるいは単元の学習を振り返り、調べてきた事柄を根拠にして考えたことや疑問、自分なりの結論などを書かせることが重要です。児童には、「分かったことや考えたことを書きましょう。」と言うよりも、「学習問題『……』について、これまで勉強してきたことの中から、特に大事だと思うことや、〇〇に伝えたいことを書きましょう。」と指示したほうが焦点化できます。また、重要だと思う資料や語句を選ばせ、それを使って要点をまとめさせるのも工夫の一つです。

「本時のねらい(学習問題)」を確認しましょう

学習問題について分かったことや考えたことを書こうにも、今日の授業で「何を学ぶのか」、「何について考えるのか」がはっきりしていないのでは、考えようがありません。

教師が本時の目標を明確にして授業に臨むことはもちろんですが、授業のはじめに「本時のねらい(学習問題)」をはっきり示しているか、それは児童にとって分かりやすい表現になっているかを確認しましょう。



板書を利用して学習のまとめをしましょう

学習の筋道や要点が分かるような構造的な板書は、その時間の学習内容を確認する手がかりになります。授業のまとめでは、大切なことに印をつけたりキーワードを線でつないだりして、学習してきた内容を整理しましょう。また、教師が説明するだけでなく、児童が黒板の前まで出てきて、板書を指差しながら自分の考えを説明したり、話し合ったりする場面があってもよいでしょう。板書を効果的に活用して学習内容の理解を図りましょう。

(4) 自分の考えを表現させ相互評価させる場面を設ける

指導のポイント

ノートを読み直す時間や友達と意見交換する場を設ける。
学習過程における気づきや評価をノートに記録させる。
振り返りの観点などを示し、自己評価や相互評価の参考にさせる。
表現したものを相互評価させ、表現の仕方や考えのよさに気付かせる。

教師の発問に対して児童が発言して答えるという授業だけでは、児童一人一人の学習状況をとらえることはできません。しかし、ノートに自分の考えを書かせ、教師がそれを読むようにすれば、一人一人の理解の状況や考えを知ることが可能になります。また、教師からの評価を返すことによって、児童に振り返りを促したり意欲を引き出したりして、学習を充実させることも期待できます。

教師が児童の学習カードやノートにコメントを直接書き入れたり、高学年であれば教師からの評価や助言を自分でメモさせたりすることもできるでしょう。単元の終わりには、それらの寸評とともに、各自がノートに書いてきたことを手がかりにして学習を振り返らせ、学習の成果をまとめさせたり感想を書かせたりします。

【振り返りの観点の例】

学習のはじめには、どのような問題意識や考えだったか
それらはどのように変わったか
変わったのは、どのような理由によるものか
学んだことを今後の学習や生活にどのように生かすことができるか



また、自分のノートを読み直したり友達と相互評価させたりして、表現の仕方や考えのよさを学び合えるよう工夫しましょう。優れた点を認め合うことは、学習意欲の向上にもつながります。具体的には、右のようなワークシートを用意して自分の考えを表現させ、それらを見せ合いながら伝えたいことを説明させたり、掲示したものを読み、付箋などに感想を書いて貼らせたりするとよいでしょう。書くことが苦手な児童には、ヒントカードを用意してそれを参考にさせるなど具体的な手だてを工夫しましょう。

【評価の観点の例】

学習したことが分かりやすく書かれているか
自分(本人)の言葉で書いているか
自分(本人)らしさが表れているか

- 月 日 名前.....
- 1 これまで学習してわかったことを図やイラストにかいてみよう。
題 ()
 - 2 イラストの内容を文章で書いてみよう。
*あなたが伝えなかったことを言葉で説明してください。
 - 3 友達とノートを交換しよう。
*参考になったことやアドバイスを伝えよう。
 - 4 意見交換をしてさらに考えたこと

2 「聞き合う」「話し合う」機会を生かして考えを深めさせましょう

社会科では、社会的事象を比較して、共通点や相違点を発見する力や多面的にみる力とともに、対立する考えを調整しながら判断する力を育てることが重視されます。

社会に生きる人々は、様々な問題に立ち向かい、それを解決していくために知恵を出し合い協働して取り組んでいます。そうした人々の姿を通して社会生活についての理解を深めていく社会科の学習においては、意見を出し合い、それぞれの社会に生きる人々が協働で問題解決していく過程を追体験しながら学びを深めていけるようにしたいものです。



(1) 「聞き合う」ことのできる学級を育てる

話し合いには、「話し手」と「聞き手」が必要です。聞くという行為がなければ話し合いは成り立ちません。児童にとって学びのある話し合いになるかどうかは、「聞く力（能力・態度）」が育っているか、聞き合う関係ができていくということが大きく影響します。

聞いてくれる友達がいるから話をしたくなるし、「聞きたい」「知りたい」という思いがあるからこそ学ぶことができるのだと思います。聞くことのできる児童を育て、「聞き合う」「話し合う」ことのできる学級作りをしていくためには、聞いてもらえる心地よさを経験させることが有効です。「安心して話すことができた」「よく聞いてもらえた」と実感した児童は、自分もよい聞き手になろうとするでしょう。国語科や特別活動との関連も図りながら、聞き方や発言の求め方など、話し合いの基本となる態度や技能についても指導しましょう。

(2) 意見を出し合って考えを深めさせる場面を設ける

単元の展開を考えるとときには、児童が自分の考えの変容を振り返るとともに、友達と考えを出し合って考えを深める場面も含めて構想しましょう。調べたことや考えたことを伝え合う情報交換や、学習問題について話し合う活動をすることによって、自分では考えもしなかったことを聞いたり、自分のそれまでの価値観では解決できないことに出会ったり、あるいは、複数の事実を知ったりして、より確かな情報を得ることが出来ます。

そこから、社会的事象を比較したり関連付けたりして、その意味や働きなどを考えさせることで、共通する見方や考え方、自分とは違う解釈や価値判断があることに児童は気づき、より広く、深く考えることができるようになっていきます。また、じっくり考え合うことによって、自分の考えを確かなものにしていくことが期待できます。

(3) 話し合いの仕方を指導する

充実した話し合いができるようにするためには、いくつか整えておきたい条件があります。話し合いに参加する児童が一部に限られたり、教師の意図する答えを探ることばかりに意識が向いたりしてしまわないよう、次の点に留意して話し合いの仕方を指導しましょう。

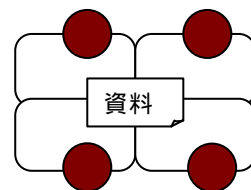
話し合いの目的を明確にする

目的意識や必要感をもって参加するのでなければ、実り多い話し合いにはなりません。何のために、何について話し合うのか、児童が理解していることが必要です。板書や掲示物で示したりノートに書かせたりして、自覚させるようにしましょう。

少人数のほうが参加者は意見を出しやすいので、ペアやグループによる話し合いも活用するとよいでしょう。ただし、話し合う目的や内容がはっきりしていないと、有効な話し合いにはならないので、事前の指示や机間指導を適切に行う必要があります。使う資料や話し合う観点を示し、話し合いの仕方についても指導しましょう。

話し合いの「核」となるものを用意する

「今、何について話し合っているのか」が分かるとともに、発言のきっかけや根拠になるものがが必要です。写真、絵図、グラフ、実物などの具体物を前にして意見を出させるようにします。こうした具体物が話し合いの「核」になり、意見が出しやすくなります。



一人一人に意見をもたせて話し合いに参加させる

話し合いに当たっては、それに参加する一人一人が何らかの意見をもっていることが必要です。「自分は、こう考えている」「友達はどう考えているのか比べてみたい」というように、各自の考えがあつてこそ、話し合いが成立します。

自分なりの考えをもって話し合いに参加させるためには、学習してきたことについて、重要度やランキングを考えさせるという方法も有効です。

その際、自分の意見をノートにメモさせたり、意見の根拠となる事実や資料を示せるよう用意させたりしておくとういでしょう。

(例) 5年生の自動車生産の学習で車づくりのキーワードを話し合った後、特に大切だと思うことを選んで順位付けを行う。

これからは「環境」のことを考えた自動車づくりが大切だと思う。だって、・・・



上位二つを決めるのなら、第1位は安全性。なんといっても事故をおこさないことが大切だよ。生産者にも消費者にも重要なことだと思うな。第2位は、・・・

考えや意見の根拠に着目させる

異なる意見が出されたときには、どのような根拠に基づいているのかを考えるようにさせます。相手の考えや意見を鵜呑みにせず、「なぜそう考えたのか」「何を根拠にそう言えるのか」「根拠としている事実は本当か」など、意見を支えている根拠に着目させることで、見方や考え方の違い、事象間の関連や共通点などがはっきりしてきます。根拠が明らかになれば、お互いの考えを認めつつ、合意点を見いだすことも可能です。批判的に受け止めて納得できるまで考え続けることや、あいまいな点については相手に質問することを指導しましょう。



社会科は、社会生活についての理解を基盤に、社会の一員として行動する上で必要とされる能力や態度を身に付けさせる教科です。学習対象となる社会のできごとを正しく理解することが学習の出発点であり、確かな事実認識に基づいて考えることが重要です。日頃から、次のことを意識して指導に当たしましょう。

○ 事実をしっかり見る、ていねいに見る習慣を身に付けさせる。

- ・ それは何か
- ・ いつのことか
- ・ どこなのか
- ・ どのような様子か
- ・ なぜなのか

比べてみる

ほかの場所、場面、時期、
立場にも共通することか

複数の方法、資料で調べ
てみて分かることは何か

○ 事実についての意味付けや関係付けをしながら自分の考えをもたせる。

意見は、その根拠との関連において評価されるものです。適切な理由付けができるかどうか重要で、意見そのものを否定しては議論になりません。例えば、江戸時代の末に日本が開国をした背景を調べていく中で、「開国はやむをえないことだった」と考える児童もいれば、「開国すべきではなかった」という児童もいるはずで、当時の人々の中でも様々な考え方があり、判断が分かれるのは当然のこととされます。

一方的に結論付けるのではなく、それぞれの主張の根拠を示し、それぞれの考えのよさや問題点を検証しながら、新たな考えを創り出していくとする態度を育成していくことが大切です。



平成 18 年度 研究委員会（小学校・社会科）

総 括	栃木県総合教育センター		所 長	五味田謙一
研究委員長	同	研究調査部	部 長	江部 信夫
研究副委員長	同	研究調査部	部長補佐	杉田 知之
委 員	河内教育事務所		副 主 幹	高橋 正彦
同	芳賀教育事務所		副 主 幹	菅間 明夫
同	佐野市教育委員会		指導主事	茂木 郁夫
同	学校教育課		指導主事	菊地 明男
同	栃木県総合教育センター	研究調査部	指導主事	中山 観
同	同	研究調査部	指導主事	小川 順子
事 務 局	栃木県総合教育センター	研究調査部	副 主 幹	矢口 真一
同	同	研究調査部	指導主事	小川 順子

平成 18 年度 栃木の子どもの学力向上を図る学習指導プラン
 確かな学力を育むために
 【小学校・社会科】

発 行 平成 19 年 1 月
 栃木県総合教育センター 研究調査部
 〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町 1070
 TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303
 URL <http://www.tochigi-c.ed.jp>

栃木の子どもの
学力向上を図る
学習指導プラン
【小・社会科】



いきいき栃木っ子3あい運動
- 学びあい 喜びあい はげましあおう -